

「多摩川水系河川整備計画【大臣管理区間編】（変更原案）」に対する公聴会

日 時：令和7年8月3日（日） 13：30～13：50

場 所：狛江エコルマホール（狛江市民ホール）6階 展示・多目的室

発言者：公述人1

多摩川センターの■■■です。よろしくお願いします。

お手元に今日配布ありました資料の別紙になります。

これはページがついてないですけども、そこに私が質問したい事項をですね、したためてあります。この中でですね、これは共有できますかね。私の書きました中にちょっと間違いがございますので、文章上訂正をお願いします。

一つはですね、1.多摩川水系河川整備計画（変更）河川環境における目標設定の考え方（25年7月13日）京浜河川事務所が出したものでございますけれども、その中にですね（3）とあります。これは（3）を削除してください。（2）からの繋がりになります。続きになります。ということで、とりあえず私の方の説明を、質問の説明を致します。

（1）のところに示したのはですね、今お話をしました整備計画の中でのですね、河川環境における自然設定の考え方の中に示されているものでありますけれども、概略を申し上げますと、読んだ方がいいかな。

（1）河川環境の目標に依存する指標種の設定プロセスの中で、「6.対象河川で求められる環境や条件の整理」として挙げられている多摩川における水質、水量、水温ですね、河床地形、地質、河床材、生物相など、多摩川の河相は人為的に近代になってから大きく変わってきたということはお承知だろうと思います。そうした変動に対してですね、指標種の持続的生育の場づくりと、変貌した河相をどうすり合わせ、どう再生・復元していくか流域の土地利用や都市経営、運営に関する大きな問題と関わりが広い、深い関わりがある、ということでそこまで考慮した話なのかということです。

その具体で言いますと。水質がですね、例えば水質で言えば、昭和60年、いや40年代の水質汚濁の時期から流域の下水道整備、これは流域下水道の整備もそうですけれども、ずいぶん整備が進みまして、水質環境そのものは環境省が定める水質基準に近いという形でクリアをしたということで安定しているというような評価をされておりますけれども、水量の中身を考えてみますと、通常この狛江、中流部では平常時の流量の70%、あるいは場合によっては80%はですね、上流からの下水処理水で維持されているという状況があります。加えてですね、水質的にも完全に栄養塩類を除去したかといえ、そんなことはないわけでありまして。それと特に問題なのは、処理水の排水の中に、排水が非常に高温化をしてきていて、多摩川の水温そのものが非常に高くなってきている。これを合わせてですね、ほかの荒川とかその他も含めると、東京湾全体が水温が上がっているということにもなっているわけですけども、そういった状況の改善も含めた形での指標種の改善ですか、ということが一つ。あるいはこれは河床の土砂の問題もあります。多摩川の要するに礫の採取っていうかですね、運び出しから含めてですね、多摩川の河床は地形もそれから要するに河床材もずいぶん変わってきているのですね。それはもう供給の問題もそれから流出の問題も含めてですけども、ずいぶんこの数十年で変わってきているというよ

うなご指摘があります。それを合わせてここに示した河相という言い方をしています。

ということでそこまで考えて、都市問題まで考えて、都市構造との関係も含めてですね、指標種を設定されたのか。そこらへんが少し、先ほどのご説明の中でも判然としなかったのでご質問をしたい。

二つ目、似たような話であります。指標種の選定とその生息環境づくりのための改修事業、創出事業に河道掘削、樹木伐採等が主に取りあげられ、干潟、水生植物のですね、植生地あるいは裸地の創出等の環境を示していますけれども、河道掘削の方法としてどのような方法を考えているか。これはですね、文章の中には要するに流水面の掘削。この流水面をなんとかするかよくわかりませんが、河道全体の掘削ということではなくて、流水面の底の方を掘るのだというようなことがあります。これが本当に掘削というか、断面を恒常的に増やす要因になるかどうか、おそらくですね、すぐにまた埋まってしまうということで、毎度、毎回掘削事業っていうのがですね、行われるのではないかという危惧が一つあります。ということでありまして、計画案には、河口部においては干潟を造成するとして工事を行っているが、干潟が自然に維持されるため、これは形成も含めてです。それから流失も含めてでありますけれども、自然に維持されるためには土砂やこれは流況、ヨシですね。間に点が入ります。ヨシなどの植生との関係、それからメカニズムの理解が必要と思うがデータはあるのか、メカニズムっていうのは流水形状の流況というんですかね、例えばその流心とその脇の流れ方は違う、速度も違うというようなことがあるわけであるわけですが、特に干潟の形成は、荒川の場合でもそうですけれども、ヨシ帯との関係が非常に大きな要因になります。というのは、ヨシ帯がフィルター効果をもたらして流水中に含まれている浮遊物を大きいものからどんどん、どんどん落としていく。その先に要するに流速が止まった瞬間にシルト状のものがそこに落ちて、それでヨシを、干潟を形成していくということでありまして、これを要するに平面的なメカニズムの構造がしっかりしていないと、持続的に干潟を維持することができないのではないかと危惧がありまして質問であります。

それから樹木の伐採は要するに、これまで台風 19 号、19 年ですかね、2019 年か 19 号かちょっとははっきりしませんが、大洪水を元にして、これは特に西九州の中小河川の中に流出してくる主に針葉樹林が堰アップ、ダムアップのですね、橋に引っかかったりなんかして、ダムアップの影響があって堤内地側に洪水が入ったというようなことが頻繁したためにですね、河道内の樹木を切ろうってことが全国的に行われた。これを 1,600 億の補正予算を作ってですね、とにかく伐根も含めて徹底的にやろうという方針がでましてですね、全国から悲鳴のごとく連絡があったものですから、国交省と交渉をしてですね、市民団体ときちんとそこら辺のこれは洪水により流出しそうな川なのか、木なのか、あるいは生態的に非常に重要な役割を持つような木なのか、というようなあたりをお互い検証してから伐採をしてほしいというような要望を出しまして、一部はその要望が通ったようでもありますけれども、ここに示してあるように樹木の伐採っていうのは、洪水による流下、あるいは堰アップ、ダムアップのですね、役割を果たすということでの伐採なのか、それともほかの要因があるのか、このへんが少しわかりませんでしたので質問いたします。そして生物の環境づくり等環境の面からの話からすると、樹木の伐採は、非常に大きな生物環境にダメージを与える。これは要するに食物連鎖上の問題もありますけれども、そこらへんが少し矛盾をしてないかという思いであります。

それからですね、4 番目、同整備計画（変更）、これは治水事業に関する説明、以下同文であり

ますけれども、質問として(1)整備内容の例、河道掘削、築堤、堤防の整備にあげられた事例は、生物の多様な生息な場づくりに反する整備、川らしい景観整備、景観形成に反する整備となっていないか、治水と環境が両立する整備と異なる構造になっていないか、というのは今ご説明がありましたけれども、堤防の高水部についての整備というのは写真があって、実際の施工例なのかどうかというのが、先ほどの説明資料の中の4ページか5ページにあったというふうに思います。という例だとか、あの河道掘削する場所だとか、そこらへんがですね、どうもこれ絵だけなのですけれども、事例として実例として実施されたのかどうか別にしましても、環境と治水対策っていうのは、河川法の中でやっぱり両立をなささいという意味で、あえて環境を入れた。環境を公の目的としたわけですからけれども、そこらへんが要するにあいまった技術としてここに発揮されているのか、示されているのかっていうのが、ちょっと技術的にですね、土木屋の目からみた時におかしいのではないかと思いますので質問します。それが治水と環境が両立する整備とは異なるのではないかとこの質問です。

(2) 今回の整備計画の大きな目玉として多様な生物の生息環境の場づくりを定量化するという目標がある、ということであります。多摩川ではこれまでの魚道整備、ワンド整備、カワラノギク育成の砂利河原の造成など、様々な環境事業がですね、環境整備事業がこれはモデル的なことも含めて行われてきました。これは数十年、40年ぐらいがですね、いろんな事業がですね、多摩川に持ち込んできた経歴があります。これはまちづくりも含めてで、ということですね、いろんなことをやっていますけど、特にワンド整備ですね、それから魚道の整備、ここにあったカワラノギク育成等の砂利河原の造成みたいなものがですね、どうも良い結果をもたらしていないのではないかとこのことが、私の感想でありますけれども、それを含めてどういう検証をされて、また新たに、こういう定量目標に加えられたのかというあたりをですね、少し詳しくご紹介頂ければいいなというふうに思っています。要はですね、先ほど申し上げたように河相がずいぶん変わってきているので洪水も渇水の頻度も低くなっている、ただ大きい場合は大きな洪水が出るということで、少しそこら辺の流水のメカニズムがですね、違ってきているという風に思っておりますので、特に砂利河原のつくり方っていうのは極めて難しいというふうに思っております。これは水質の問題もあります。砂利は敷いたけれど、そのなかに富栄養化した土砂がかぶってしまうと、貧栄養化を目標とする生息域とするカワラノギクだとかカワラなんとかっていうのは、もともと栄養価の高いところだと育たない、ということが明らかでありますので、そこらへんの検証の仕方ですね、少しお教えいただきたいのと、本当にこれが実現するのかというあたりをですね、非常に危惧をしております。ということがありますので今申し上げましたように現状の河川、下から4行目、現状の河川特性を活かした整備のあり方、方針の見直しと思われるけれども、今回の整備計画変更はですね、過去の事業との検証を充分にもう一回時間をかけてやった方がいいのではないかとこのように思います。あの、河相の変貌と将来の気候変動の予測、流域の土地利用、流域住民との連携、利水・治水・環境が両立する都市河川、多摩川らしい整備の環境のあり方をやっぱり創案をして実現可能なプログラム作りを行うように改めて要請をしたいということあります。この目標が、整備計画が目標達成年度を何時にするのかっていうあたりもありますけれども、高規格堤防のように100年先でもわからないっていうような計画っていうのは、ちょっと気候の変動の時期からするとですね、間違い、目標として達成できないっていうのはわかるのではないかなという気がしますので、少し時間をかけてでもですね、達成可能な事業というもの

を考えていくというふうなことをやっていただいたらどうかということの提案でございます。
すみません、長くなりましたけれども以上です。